

Trial & Error

No.311

September-October 2014

特集

市民に押し寄せる紛争や分断の波

写真上：平壤の子どもたちに「平和」について読み聞かせをする浜田桂子さん。(2013年撮影)

写真下：「下からの平和」につながることを目指して、イラクで複数の民族や宗教の子どもたちを集めて行なわれる「平和ワークショップ」。(2011年撮影)



特定秘密保護法案、武器輸出三原則の見直し、ODA大綱の改訂、そして集団的自衛権。クリミア半島の帰属を巡る争いやイラクでの紛争。日々目にするこうした出来事をどのように理解すればいいのだろう。今年のJVC会員総会と同日開催した「JVC会員のつどい」にお招きした佐々木寛氏のお話は、平和学という視点からその糸口を提供する刺激的なものだった。そこでの講演を再構成するとともに、ヨリアやイラクなどでのJVCの取り組みからもその材料を提供したい。(編集部)

グローバルな暴力の時代と市民の役割

新潟国際情報大学教授／日本平和学会会長 佐々木寛

■言葉が奪われている

最初に、「戦後レジームからの脱却」を掲げる現安部政権の問題を指摘したいと思います。安倍晋三という政治家個人の問題、自民党という政党の問題もあります。グローバル化の波に直面した他の先進諸国と同様の政治現象が観察できます。それは、国内の政治統合のために、福祉やデモクラシーではなく、ナショナリズムや対外的脅威の存在に依存する状況が顕著になりつつある、ということなのです。

その最たるものが、現政権が用いている「積極的平和」という言葉です。これは私の専門分野である平和研究ピース・スタディーズの基礎概念なので、現政権の誤用(悪用)をしっかりと正しておきたいと思えます。平和は「消極的平和」と「積極的平和」の二つに分類できますが、「消極的平和」とは、目に見える紛争が無

い状態のことを言います。それに対して「積極的平和」は、目に見えない「構造的な暴力(社会に内在している格差や抑圧など)」も無い「積極的」な状態を意味します。地域紛争のような直接的暴力もすれば構造的な暴力が背景にありますから、「積極的平和」を実現するということは、社会構造の変革によって紛争を予防することを意味しています。つまり、JVCの皆さんが長年に渡って取り組んでこられた地道な活動こそがまさしく「積極的平和」のための活動に他なりません。

しかし現在は、「平和」や「安全」という本来私たち市民のためにある大切な言葉が、ことごとく政治権力に奪われている、政府の戦争準備のために使われているという状況だと思えます。だからまず私たちは、これらの奪われた言葉を取り戻さなければなりません。そのためには、個々の出来事の相互関係(歴史)を取り戻す必要があります。

九一年の湾岸戦争(第一次イラク戦争)をきっかけに、日本では国際貢献論が浮上しました。これは、現在「普通の国」を目指す外務官僚や政治家たちの大きな行動の源泉となっています。〇三年の第二次イラク戦争でも、アメリカから「ブーツ・オン・ザ・グラウンド(地上部隊を派遣しろ)」と言われました。安倍首相は「自衛隊は湾岸戦争やイラク戦争には参加することはこれからも決してない」と言っていますが、すでに日本はアフガニスタン、イラクにおける「対テロ戦争」に「参加」してきています。

このように、現在の集団的自衛権の行使容認に至るまでには長い文脈があるわけですが、しかしメディアではしばしばこうした歴史的経緯は抜け落ちてしまふ。それゆえ、JVCのような長年に渡ってある地域を定点観測している国際NGOの皆さんが、市民社会に真実を伝えていくことが極めて重要になっていくと私は思います。

佐々木寛氏プロフィール

新潟国際情報大学教授。専門は、国際政治学・平和研究・現代政治理論。現在は特に、核兵器と原子力発電の両者を含んだ核エネルギーをめぐる世界の政治 (Atom Politics) に関心があり、研究を進めている。ブログは、<http://sasaki-hiroshi.com/>。日本平和学会会長。



〈主な近著〉

◎『平和を考えるための100冊+a』編著

(法律文化社、2014年1月)

◎『国際共生とは何か』共著(東信堂、2014年2月)



講演当日には、身体的ワークショップもサバリだけ実践していた。ある問いに対して、自分が「+100℃(はい)」~「±0℃(どちらでもない)」~「-100℃(いいえ)」のどのあたりか、一列に並んでみてそれぞれ意見を聞いてみるもの。

■画一的消費と排他主義

現在の世界を理解する上で、ベンジャミン・バーバーという

政治学者が、『ジハード対マックワールド』という面白い本を書いています。ここで「マック

ワールド」というのはマッキントッシュやMTV、マクドナルドに象徴される、グローバルで

画一的な市場経済の世界です。一方、「ジハード」とは、排他

的なアイデンティティやそれによつて引き起こされる地域紛争

を意味します。この両者の世界は、現在同時進行しています。

しかしそれだけではなく同じコイン(現象)の裏表をなしている、という指摘です。つまり、

世界中で「マックワールド」が拡大することこそが、そういった「ジハード」の世界を育み、

促進している。しかも、その二つは言わば協働して、世界中のデモクラシーと市民社会を破壊

している、と言つのです。

この見方は、基本的に正しいと思います。世界中で今、どの

地域でも一番やせ細って、危機に瀕しているのは市民社会(市民的連帯)とデモクラシーに他な

りません。先鋭的なナショナリズムや軍事主義が世界中で台頭

してくる予感があります。

マスメディアでは日々様々なニュースが報じられますが、これら個々の出来事の中には相互

■個別問題の関連を見出し、共通の危機として再定義

多様な個別の問題について取り進む団体や運動はいろいろとありました。しかし今のよ

うな危機の時代に必要なのは、その個々別々の問題の相互関連

性を見出し、それらを「市民」としての共通の課題としてと

らえ直し、一致協力して問題に取り組みむということです。

その意味では、微力ながら、例えば私が取り組む平和研究平和学」という包括的な学問分野

はそれに寄与することができると思っていますし、何より、世界中に現場をもっているJVC

の皆さんには、それら個々の現場がもっている問題をつなぎ合わせる、市民にとつて共通の問題として再提起するという重要な役割があると思います。

「三・一一」後、日本の中にはすでに国内避難民が大勢存在していますし、民族差別もあり、領土紛争もある。「平和な日本」

と「紛争に満ちた外国」という図式は終焉しています。「平和ならざる世界」はすでに身近にあって、それは世界で起こっている問題と深くつながっています。こうした場合に重要なのは、理想主義よりも現実主義です。市民にとつて本当の「安全」とは何か、「平和」とは何かを、

自分の日常生活や地域の中でリアルに考えていくことが大切です。例えば、私が住んでいる新潟には世界最大の原子力発電所があります。その再稼働を想定した場合、いざ事故を起こした際の対策を地域住民は自らの「安全」のこととしてリアリズムに基づいて調べていく。このような市民による自律的な再検討は、国境を越えた様々な紛争地域とも共通・共鳴する部分があつて、それが結果的に、日本の市民が世界とつながっていく回路になると思います。

ひとつ私が強調したいのは、安倍政権を支持する人たちや、田母神氏に票を入れる人、特に若い人たちを敵視せずに味方にならないといけないということです。それは、彼らの中には概して世の中が変わってほしいとい

う共通の願いがみて取れるからです。先ほどのマックワールドの話で言えば、人は同じ映画を見て、同じ音楽のヒットチャートを聴いて、相互につながっているように見えます。けれども、個々人は実はとても孤立して、寂しくて仕方がない。その寂しさが新しい排外主義の温床になっています。

私はいま大学の授業で、人間的な相互理解の技術を身体で磨くためにファシリテーションやワークショップを取り入れています。学生諸君は「教わる客体」ではなく、地域の小中高校に向いて「教える主体」となりま

す。そして生徒や児童と「共に学ぶ経験」を積む。そうすると、学生たちが変わっていきます。単に資格や単位のためではなく、人とつながって、自分が新しく生まれ変わるために「本来に」勉強するということ、新しい次元に行くんですね。自分たちの郷土の後輩という、具体的な人間や他者に責任を持つようになる。批評したり、分析したりする他者ではなく、責任を持つ他者」をいかにたくさんつくっていくか。それが、現代の若者を新しい排外主義から守る大きな力だと思っています。

■責任ある他者をつくる

ひとつ私が強調したいのは、安倍政権を支持する人たちや、田母神氏に票を入れる人、特に若い人たちを敵視せずに味方にならないといけないということです。それは、彼らの中には概して世の中が変わってほしいとい

う共通の願いがみて取れるからです。先ほどのマックワールドの話で言えば、人は同じ映画を見て、同じ音楽のヒットチャートを聴いて、相互につながっているように見えます。けれども、個々人は実はとても孤立して、寂しくて仕方がない。その寂しさが新しい排外主義の温床になっています。

私はいま大学の授業で、人間的な相互理解の技術を身体で磨くためにファシリテーションやワークショップを取り入れています。学生諸君は「教わる客体」ではなく、地域の小中高校に向いて「教える主体」となりま

す。そして生徒や児童と「共に学ぶ経験」を積む。そうすると、学生たちが変わっていきます。単に資格や単位のためではなく、人とつながって、自分が新しく生まれ変わるために「本来に」勉強するということ、新しい次元に行くんですね。自分たちの郷土の後輩という、具体的な人間や他者に責任を持つようになる。批評したり、分析したりする他者ではなく、責任を持つ他者」をいかにたくさんつくっていくか。それが、現代の若者を新しい排外主義から守る大きな力だと思っています。

※注①・「ジハード対マックワールド 市民社会の夢は終わったのか」(ベンジャミン・バーバー著、三田出版会、1997年)

NGOにとっての集団的自衛権の議論

JVC代表理事 谷山博史

■閣議決定とJVCの提言

七月一日、安倍政権は首相の私的諮問機関からの答申と与党協議を受けて、集団的自衛権を含む海外での武力行使を容認する閣議決定を行なった。この決定はアジアにおける侵略戦争とそれを招いた軍国主義への反省のもとに戦後連綿と受け継がれてきた平和主義を否定するものである。閣議決定に先立つ六月

十日、JVCは「紛争地の現実を直視し、武力行使で『失うもの』の大きさを考慮した議論を求めます」と題する提言書を発表^{※注①}した。

二〇一二年石原都知事の尖閣諸島を東京都が購入するとの発表を受け、民主党政権は尖閣諸島の国有化を宣言する。これに中国政府が猛烈に抗議し、中国各地で日本批判の民衆デモが燃え盛る。以後中国海軍の尖閣沖での活動が活発化する。日本は後戻りできない一線を越えてしまった。そして戦後レジームの

脱却を唱える安倍自民党が総選挙で大勝する。一三年末以降は秘密保護法と国家安全保障会議設置法が成立し、武器輸出三原則が撤廃され、米軍普天間飛行場の辺野古移設に向けた埋め立て申請が許可される。アメリカの要求に呼応しながら日本の軍事化の奔流が堰を切って流れ出したと言える。

■紛争現場の当事者として

日本を取り巻く「脅威」が声高に叫ばれ、「脅威」に対処するためとの理由で「禁じ手」である解釈改憲が行なわれてしまった。私たちNGOはこの動きに手をこまねき、口をつぐんでいいいいのか。NGOの立場から言うべきことはないのか、なすべきことは何なのか。明らかたことは、紛争の現場で活動してきた当事者として自らの知見と信念を述べることである。

五月十五日の記者会見で安倍首相は「自衛隊がNGOを守れなくていいのか」と述べ、

NGOが武装集団に襲われた場合を想定して、PKOで派遣された自衛隊が「駆け付け警護」^{※注②}で武力を行使することを正当化した。これに対して、スーダン

駐在代表の今井は七月三日の毎日新聞で「紛争地域では、軍服を着た民兵が誘拐や略奪に加わっていたり、強盗組織が一般市民を装っていたりする。『自衛隊が駆けつけ警護でNGOを守るというが、だれが敵なのかも見極められないのが紛争地域の実態だ』として、首相の示した事例の現実性のなさを批判した。提言書でも述べている

が、近年の紛争の現場は武装勢力と住民が区別できない形で混在する「住民の中の戦争」であることが多い。ひとたび外国の軍隊が武力行使を行なえば、紛争の当事者となり泥沼の戦闘に巻き込まれることになることを私たちはアフガニスタンやイラクで学んだ。スーダンや南スーダンの内戦でPKOが外国人や住民救出に戦闘部隊を派遣し

なかつたのはこれらの教訓からである。

■アメリカの戦争への参加と失われるもの

今回の閣議決定の内容をみると、海外での武力行使についてはほぼすべての形態が盛り込まれている。閣議決定の実施が法整備によって可能になれば、日本はイラク戦争やアフガニスタン戦争のような不当な戦争にも引きずり込まれ、自衛隊が参戦することになるであろう。集団的自衛権の行使であれ国連の集団安全保障措置への参加であれ、これまで日本がアメリカの参戦の要求を受けながら海外で武力行使をしないという最後の「一線」を守ってこられたのは、憲法とこれまでの憲法解釈があつたからである。海外での武力行使を容認することは、非軍事に徹した国際協力によって積み上げられてきた平和国家としての国際的な信頼という資産を失うことにもなるのである。

※注①：提言書『集団的自衛権をめぐる議論に対する国際協力NGO・JVCからの提言』(JVC公式サイト：<http://ngo-jvc.info/1kgwdKb>)

※注②：平成26年5月15日 安倍内閣総理大臣記者会見(首相官邸サイト：<http://ngo-jvc.info/1xmplZ4>)

子どもたちに聞いた「へいわってどんなこと?」

「リア事業担当 寺西 澄子

■連携不足の北東アジア

二〇一二年から一三年にかけて、北東アジアの各国でリーダーが次々に交代しました。日本は二度目の安倍政権となりましたが、領土問題や歴史問題が継続するなかで、首脳会談もほぼ開催できないまま現在に至ります。朝鮮民主主義人民共和国の「核・拉致・ミサイル」や朝鮮半島有事の可能性は地域の大きな懸案で、解決のためには韓との「未来志向」の協調が欠かせなかったはずなのに、その道を絶つ勢いです。

そのかわりの旗印として掲げられたのが、「積極的平和主義」。近隣国を牽制しながら外堀は固め、いざという時に備える外交のようですが、足元でこれだけ緊張を煽っておきながらの平和主義には違和感がぐぐえませんか。

■手触りのある平和を探して

シミュレーション上の「脅

威」に不安を膨らませるばかりの現在だからこそ、私たち自身が実践できる具体的な「平和」を探し、共有したい。そんな思いから昨年度、『へいわってどんなこと?』という絵本を持って、平壤やソウル、中国の延吉、そして日本国内を巡りました。

この本には、著者の浜田桂子さんが考え抜いた具体的な「平和」が提示されています。「せんそうをしない」「おなかがいたらだれでもごはんがたべられる」：そして、「ぜったいに、ころしたらいけない、ころされたらいけない」と、いのちの大切さが力強く訴えられます。

浜田さんがご自身の言葉でじかに話してくださいましたことにも助けられ、子どもたちに「へいわってどんなこと?」と率直に問いかけることができました。「ゲームをして、おいしいものを食べて、眠れることがぼくの平和だ」(ソウル、小4)

「遊園地で思いっきりのも

のに乗って遊んだり、ピクニックに行くことが平和だと思えます」(平壤、小3)

■異なる考えをどうやって受け止める?

日常に感謝する一方で、そればかりではない現実があることを子どもたちは知っています。「戦争は悪いことです。でも、戦争をしてたかわらないと幸せになれない人もぎつ」と思っています」(大阪、小5)

「ぼくは、強い武器があつてこそ、平和がまもられると感じました」(平壤、小3)

日本では平和はあたりまえのものですが、平壤では自ら獲得するもの、力をもってでも守らなければならぬものでした。ここで、「やはり考え方が違う」「到底相容れない」とあきらめるのは簡単ですが、子どもたちは「なぜ武力ではだめか」「それに代わる方法は何か」と、先を見据えて考えていました。「武器は自分や仲間を守るた

めにあるものだとおもっていたけれど、ほんとうは人をぎずついたり、自分をぎずつけるものだとかかりました」(気仙沼、小4)

「戦争をそそのかす人にひきずられず、みんなが心をひとつにして平和をつくる。そのためには、みんなが平等でなくてはならない」(ソウル、小6)

子どもたちの言葉は示唆に富んでいます。自分の主張を押し付けて同化を強要するのではなく、異質な部分も認めたいうえで、自らの主張に耳を傾けてもらえる土壌をつくる。その方法は他人任せではなく、私たち一人ひとりが考えなくてはならない。

そんな声に背中を押されて、今夏も各地で集めてきた「へいわって、こんなこと!」を日本の中でもお隣の国でも知らせる行脚が続きます。私たち自身も出会った人たちの声に耳を澄ますことを心がけながら…。



■真剣な顔で絵本の朗読を聞く子どもたち(平壤市ルンラ小学校)。



■「へいわって、どんなこと?」の感想シートを書く子どもたち(韓国)。

イラクから、パートナー団体代表のアリさんが来日します！

キルクークには多数の国内避難民が隣県などから流入しており、インサーンは避難民への支援を計画しています。一方で、これまで取り組んできた「平和ワークショップ」についても、「今後もぜひ続けていきたい。平和活動の意義が高まっている」とアリさんは話しています。JVCは、今年9月にアリさんを日本に招き、イラク・キルクークの現状や今後の取り組みなどについて報告してもらう予定です。



これ以上の分断を生みださないために

イラク事業担当／経理担当 池田 未樹

■「下からの平和」をつくる

今年六月、イスラム教スンニ派系の武装勢力がイラク第二の都市モスルを一夜にして制圧し、首都バグダッドに向けて侵攻迫る勢いをみせ、その後も政府軍との戦闘は続いています。国連によると戦闘による六月の死者は二千四百七十七人（うち千五百三十一人が民間人）で、これは〇八年以降最悪の状況です。また、七月末現在で約四百四十万人の国内避難民が発生しています。JVCのパートナー団体・インサーン代表のアリさんは、「多くの国内避難民がキルクーク市内に避難している。その人々たちを支援するためにも、日本の方々にイラクの実情を訴えたい」と伝えてきました。キルクーク市は、イラク北中部の都市で多様な民族と宗教の背景を持つ人びとが住んでおり、もともと治安の悪い地域のひとつでもあります。

そうしたキルクーク市において、インサーンは「下からの平和」をつくる動きにつながることを目指し、民族も言語も異なる子どもたちを対象にした「平和ワークショップ」を実施してきました。言葉を使わなくても交流できるアートやスポーツなどのセッションを折り混ぜながら、文化の多様性、子どもの権利、平和構築、紛争解決について考えます。そして徐々に対象をその保護者、学校の教員、教育関係の行政担当者などにも広げ、浸透を図り、それが個人に蓄積され、「下からの平和」をつくる動きにつながることを目指してきました。これまでJVCも支援してきたこのワークショップについて、イスラム教のイマム（宗教集団の指導者）であるシユェク・デリアルさんは、「ワークショップの良い噂を聞き、活動についてとても意義を感じています。平和の種まきのようなものですね」と、昨年に私も参加した現地でのミーティングでそう話してくれました。

しかし前述のような状況の中、今年の開催が危ぶまれていることが残念でなりません。

■イラクに関わってきた学びを日本につなげる

昨今は日本においても、福島での住民分断、ヘイトスピーチ、沖縄の基地問題等々、分断を生じさせる様々な現象が見られます。イラク事業では昨年来、平和研究を専門にされている佐々木寛教授にもご協力いただいて、戦争や紛争、争いなどの暴力行為の源は何なのか議論してきており、そうした暴力の源泉は私たちすべての個人の間になかあり、それを私たちは自らコントロールする必要がある、という考えに至りました。そして、暴力を「分断を生じさせるあらゆる行為」と定義しました。今後、日本でも分断や暴力について考えるワークショップを計画しています。私たち自身が紛争や争いごとに巻き込まれないためには、すべての当事

者から中立である必要があります。「米国の味方がテロリストの側か」という論法によって一方の味方になることは、自動的にもう一方の敵になる危険性ははらんでいるからです。

■一方の味方になることは

「将来、日本に行ってみよう」イラクのホテルのレセプションで働く聡明な顔立ちの若者は、イラクの紙幣に印刷されたミナレット^{※注①}を誇らしげに私に見せ、かつてイラクでは哲学・数学・自然科学・医学などが融合した高度なイスラム文化が栄えていたことを教えてくれました。マーケットでは、バグダッド出身の大学生の女性が「日本の若者の文化に興味がある」と素敵な笑顔で話しかけてきました。私は、こんなに人なつっこく笑顔を作る人たちを知りません。一方だけの味方になること、それはこんな彼らの笑顔を曇らせることになるのではないのでしょうか。

※注①：アッバース朝第8代カリフがサーマッラーに建築したらせん状の尖塔。イラクでもっとも重要な遺跡のひとつとされ、イラクの250ディナール紙幣に印刷されている。

土地収奪が起こるまで何もできないのだろうか

南アフリカ事業担当 渡辺 直子

今回は再びプロサバンナ事業をとりあげる。7月にモザンビークで開催された国際会議に参加した渡辺が、そこでの議論を通して感じた「音のない戦争」。それを止めるためにはどうすればいいのだろうか。(編集部)

■分野を超えた反対へ

六月二日、モザンビークにおいて「No to ProSAVANNA」という全国キャンペーンの開始が発表された。キャンペーンにはナカラ回廊地域の小農および小農組織連合であるUNAC、女性フォーラム、人権リーグ、環境団体など分野を超えた八つの全国組織が参加している。

プロサバンナについて語る際、よく聞かれる質問がある。「日本企業やプロサバンナ事業は土地収奪を起こしているのか？」である。モザンビークでは本誌でも報告してきたとおり、海外投資企業による土地収奪はすでに頻発している。一方で、確かに日本企業による直接的な土地収奪はこれまでに報告されていない。であるならば、なぜ当地で全国キャンペーンが張られるほどの反対にあうのだろうか。

■生活基盤である土地を奪われないために

昨年に引き続きUNACらの主催で七月二十四日にモザンビークの首都マプトで開催されたモザンビーク・ブラジル・日本三カ国民衆会議において、プ

ロサバンナ事業対象三州の小農代表が各地の土地収奪の事例を具体的に語りながら訴えた。

「これまで政府は開発についていかなることを約束してきただけで私たちがいまだその約束の実現を目にすることができない。だからプロサバンナによって小農支援をされると言われても信じるのが難しくなっている。プロサバンナに対する不安を訴え、質問すると『君たちは身の安全に気をつけたほうがいい。もし周囲にプロサバンナに反対する人がいるならば知らせてくれ。そいつは刑務所に入れられるだろう』と言われた。このプログラムが人々を脅して私たちが土地を奪うためのものではないと、どうやって思えるのか。プロサバンナ対象地ではすでに多くの土地収奪があり、人々が土地を失い始めている。ここにさらにプロサバンナという巨大事業が来たら私たちはどうなるのか。それが知りたいのだ。なのにプロサバンナのことばまったく知ることができない。だから私たちはプロサバンナが良いことだと思えないのだ。小農は信じられないのだ」

的に奪われているモザンビークの人たちが置かれた状況というのはさながら「音のない戦争」だと感じた。爆撃で怪我をしたり、即座に命を落とすことはないが、生きていく「場」と「手段」を奪われ、少しずつ食料が底をつき始める。しかしどうすることもできず、先が見えない不安。じわじわと襲ってくる「このまま死ぬのではないか」という恐怖。そして「まだ」土地を奪われていない人たちは土地収奪という爆弾がいつ自分たちの村に落ちてくるのか、日々怯えて暮らしている。その中で、何の情報も得られない小農たちの不安はいかばかりかと思う。反発を覚えるなどというのが無理な話だ。

■誰と誰の対話が足りない？

今回、このような議論があった民衆会議に、日本の大使館、JICA関係者も参加していた。彼らは何を感じたのだろうか。これまで我々が「公開書簡」

への返答や情報開示を求めた際、外務省・JICAは「モザンビーク政府が主体でしているから日本からは回答しない」「モザンビーク政府の確認が必要」という言い逃れをしてきた。すべての責任はモザンビーク政府にあるということだ。だが本当にそれでいいのだろうか。JICAが掲げるミッション、「(支援国の)ガバナンスの改善」とは一体何なのか。日本の事業関係者はモザンビークの小農の前にまず、同国の政府関係者との対話から始めたほうがいいかもしれない。

◎

最初にあげた質問への回答に戻ろう。プロサバンナ事業による直接的な土地収奪は、まだ起きてはいない。しかし、だからこそ今できること／しなければいけないことが多くあるということ、小農たちの声は教えてくれている。それは、開発援助の実施における予防措置や相手国政府との対話のあり方についても多くの示唆を与えているように思えてならない。それに応えることは、ODA、ひいては日本の外交にとってもメリットになるのではないだろうか。



■総会当日は多くの会員の方にご参加いただきました。

事務局次長 細野 純也

第十五回会員総会を二〇一四年六月十四日に東京・青山にて開催しました。七十二名の会員(うち正会員は六十九名)が出席、委任状と合わせて正会員は二百五十名の参加となり、定足数を満たしました。

冒頭の代表谷山のあいさつでは、昨年からの特定秘密保護法やODAの軍事利用の拡大、そして集団的自衛権の行使などの議論が次々と進んでいく状況において、これまでJVCが長年

取り組んできた、国を越えて問題を解決する方法や経済の地域循環や地域の自己決定、そうした事がいままでも以上に厳しい状況に置かれていること、しかしそれでも活動現場で出会う人々のたくましさや明るさに希望を感じることを説明しました。

■一号議案・

一三年度活動報告・決算報告

一号議案として、一三年度の地域開発、人道支援、国内の各活動の報告、経理担当から一三年度の決算報告、監事から会計と事業監査報告、また認定NPO法人格を継続取得できたことも報告しました。質疑応答(下

梓内参照)の後、これらの活動報告・決算は承認されました。

■二号議案・

一四年度活動計画・予算案

続いて二号議案として、一四年度の各分野の活動の計画と予算案を提示しました。加えて労務面の整備のために事務局次長を任命する旨も説明しました。質疑応答の後、活動計画・予算案は承認されました。

■三号議案・役員改選

最後の三号議案は役員改選でした。ここでは、星野昌子理事と大河内秀人理事の退任、ならびに新たに木下尚慈さんと金敬黙さんの理事就任が承認されました。なお、星野昌子さんは引き続き特別顧問としてJVCに関わっていただきます。

13年度活動報告および決算に関する主な質疑応答

- 質問①認定NPO法人格の税制優遇(みなし寄付金など)の見直しに関する報道が昨今あるが、それについて状況を把握しているか?
- ▼シーズがこれに対して提言活動を実施しており、その推移を見守っている。
- 質問②会員数減少、カレンダー収入減少と報告があったが、対策は?
- ▼入会勧誘努力が足りないと感じている。カレンダーについては計画で述べる。会員・カレンダー双方において会員の皆さんにも協力をお願いしたい。
- 質問③年会費一万円は高いのでは、三千円の団体もある。
- ▼年会費を下げた場合に、現在の会費収入を維持できるかどうかなども含めて、会員へのアンケートも視野に入れて検討したい。
- 質問④昨年カレンダーを注文した際に応答が悪かった。顧客対応の改善が必要では?
- ▼改善するよう努力する。
- 質問⑤政策提言の項目、パレスチナの報告で「インバクトには疑問が残った」とあるが、実際はどういった反応があったのか?
- ▼具体的にはポーランド人のNGO活動家がイスラエルへの入国拒否をされた件に対して国際NGO共同で抗議した。また、在外公館、日本の外務省にも助力を要請したが、「まずはポーランドが動かないと日本としては動けない」と言われた。

14年度活動計画および予算案に関する主な質疑応答

- 質問①南タイの活動に関して、昨今の政変の影響をどう見ているか?
- ▼現地のパートナーと連絡を取っているが、活動時にはそれほど影響はないと報告を受けている。
- 質問②今年のカレンダーの写真家である安田泰津紀氏は、最近メディアへの露出が多くなり、販売面を考えると起用が一年早かったかと思える。次回の起用者についてその点の改善点はあるか?
- ▼来年のカレンダーの写真家である竹沢つるま氏が今年後半に写真集を出版予定なので、それと連動して販促につなげたい。
- 質問③カレンダー事務局の報告で、一三年度は収入が少なかったとあったが、今年度の計画でも当期経常増減額は九十五万円と少ない。この意図は?
- ▼最低限の堅い見積もりで計画している。もちろんこれ以上の収入を得られるよう努力する。中小企業向けの名入れ受注と写真家の地元での販促イベントを予定している。
- 質問④カレンダーで起用する写真家はどのように選ぶのか?
- ▼主に事務局内からの提案、外部からの紹介、写真家からの売り込みの三つ。竹沢氏は外部からの紹介。
- 質問⑤事務局の報告で、認定NPO法人格を継続取得したとあったが、それにしては今年度計画のほかが受取寄付金の額が少ない。これはなぜか?
- ▼昨年度は想定外の大口寄付がいくつもあったことと、イラク事業での多額の寄付金が発生する活動が前年度で終了したことが主な理由。
- 質問⑥経常収益のうち公的資金の割合が高くなっているが、昨年度から継続して公的資金を取得している事業だけに見た場合の割合はいくらか?
- ▼外務省の補助金で継続している事業のみだと四〇・七%。これでも多いので、全体に占める割合を今後下げていく方針である。
- 質問⑦広報の計画で、「説明会の改善、会報誌の改善」とあったが具体的内容は?
- ▼説明会参加者のボランティア参加率・会員入会率などを向上させるために、事前に関心を開いて当日の内容を調整したりする。会報誌についてはデザインと編集を外注する予定。
- 質問⑧コンサルタント事務局の計画で、学割チケットの説明があったが、具体的な割引額はいくらか?
- ▼各券で千円の割引を予定。
- 質問⑨コンサルタント事務局の計画で、既存以外の集客アイデアはあるか?
- ▼ここに参加している会員が友人を一人連れてくるなど、地道に増やしていく場面を増やしたい。

理事

アイネス・バスカビル (JVC 国際協力コンサート創始者)
 磯田 厚子 (女子栄養大学教授 / JVC 副代表)
 木下 尚慈 (マエストロオーラ音楽院理事長)
 金 敬黙 (中京大学教授)
 嶋 紀晶 (JVC OB / 自営業)
 清水 俊弘 (JVC 前事務局長 / 地雷廃絶日本キャンペーン理事)
 高島 哲夫 (公務員)
 田中 優 (未来バンク事業組合理事長)
 谷山 博史 (JVC 代表)
 天明 伸浩 (星の谷ファーム代表)
 古沢 広祐 (国学院大学教授)
 矢花 公平 (弁護士)

監事

黒田 かをり (CSO ネットワーク事務局長・理事)
 矢崎 芽生 (公認会計士)

顧問

熊岡 路矢 (前 JVC 代表)
 星野 昌子 (特別顧問 / JVC 初代事務局長)

新任役員・退任役員に聞きました

新任

木下 尚慈



マエストロオーラ音楽院理事長

今、世界は日に日に狭くなり各地で宗教と文化の違い・歴史的な争いに原因する紛争が頻発しています。米国や欧州諸国の弱体化と大國間のパワーバランスの変化もあるなかで、紛争の現場で数十年の経験を持ち、欧米とは異なる日本独自のフィロソフィーをもつ JVC の役割はますます重要となつてきています。

私は国内外の消費財メーカーの社員 / 役員として四十余年を過ごしてきました。ここ数年は、個人所有のマエストロオーラ音楽院で JVC 支援のためのチャリティークンサートを開催してきました。今後は、消費財のマーケティングでの成功経験を生かして、冒頭で述べた JVC の独自性と素晴らしさを広く世の中に知らせることで支持者のベースを十倍以上に広げる施策を提案・実行していきます。

金 敬黙



中京大学教授

JVC の理事としてちゃんと責務を果たせるか、いまいち不安なところもありますが、地域、世界、そして私をつなげる方法として NGO、市民活動を大切にしたいと思えます。JVC はその具体的な現場であり方法でもあります。数多くの現場・イシューにも関心を持ち続けたいと思います。また、なるべく国内外の現場に足を運べるように努めます。

このたび理事に復帰したことで、①地域での会員活動の活性化 (他の地域の会員がシェアシーを抱くように勝手に JVC 東海ブロックを立ち上げちゃうかも?)、② NGO と教育現場の双方が刺激的に学ぶこと、③ 時代的な文脈にあう NGO のスタイルを模索する、の三つを個人的な課題テーマにしつつ頑張りたいと思っています。

退任

星野 昌子



特別顧問 / JVC 初代事務局長

理事に就任して、改めて組織で仕事をすることの意義を自覚しました。理事会が JVC の決定に関りそして責任を負う。職員の現場における「安全」の問題一つを例にとっても、JVC の現場は様々な危険に満ちていて、当事者及び事務局の判断と熟慮だけに頼ってはなりません。一九八一年春タイ・カンボジア国境の町アランヤプラテートの吊橋で、盗賊の散弾銃に倒れた西崎憲司さんの死への反省が、JVC を活動者集団から脱却させ、組織創りに駆り立てました。このように重要な役割を果たす理事の選出は会員総会に諮られます。会員の皆様方のお考えに JVC の活動は基づいているのです。ぜひ総会にもご出席いただき、ご意見をお寄せください。これからは身近なことに関り深めつつ JVC を見守りたいです。

大河内 秀人



パレスチナ子どものキャンペーン理事

八〇年代半ば、浄土宗東京教区青年会事務局長という、ささやかながらドナー団体側の窓口として JVC と出会いました。住民を主体とする本来の「開発」のあり方、真の市民社会に向けた地道な取り組み、そして権力に絡め取られない確固としたスタンスに共鳴し、カンボジアチームのお手伝いに始まり、執行委員、理事と、まさに勉強させていただきました。国際協力に関わるほど、日本の民主主義が問われます。九一年の湾岸戦争で柴田さん、船川さんがイラクに飛んだ時、私は宗教者としてパレスチナを指し、カンボジア、ルワンダなどでも和平と復興に関してみんなで議論したことを思い出します。今回、自分自身の一区切りとして理事を退任いたしました。今後私の原点として関わり続けて参りたいと思います。

涙の論文提出日

JVC カンボジア事務所 現地調整員
太田 華江



ここ数年で一番私が慌てたのは、修士論文の提出日だった。私は当時、修士論文執筆に苦戦しており、論文が完成したのはまさに提出日の早朝だった。図書館も混んでいて、1部しかプリントアウトできず。しかし、大学院生は論文を3部提出しなければいけなかった。しぶしぶコンビニへ向かった。しかし、そのコンビニにあったコピー機は、手で一枚一枚スキャンしていくタイプ…。「間に合わない、本当にまずい…」残された時間はあと1時間。その時、流しコピー可能なコピー機が学校に数台あることを思い出したが、私は学校の

コピーカードのカウントを使い果たしていた。

本当に間に合わないという焦りで一杯だった時、私の前にママチャリに乗った救世主が現れた。ウズベキスタン人の友人がコピーカードを持っていて、助けてくれたのだ。そこから速かった。印刷し、製本。知らない通りすがりの人も手伝ってくれて、3人での作業が続き、なんとか時間ぎりぎりまで提出することができた。提出後、緊張の糸が切れ、泣きながらその友人と通りがりの心ある人に感謝した。友人は、子どもを一人抱えて日本に留学している。

「はなえちゃんはいつも日本で私のことを助けてくれたから、助けるのは当たり前だよ」と言われ、心が温かくなり号泣した。アメリカで思春期を過ごした私は、外国人が異国で生きることが大変なことを知っていたので、都内での外国人の子どもの支援や、留学生支援を行なっていた。

そんなこんなで、一カ月後にあった論文の審査も無事合格し、卒業することができた。それもこれも、あの時彼女が現れて助けてくれたからだと心から感謝している。

小さなラジオ局とコミュニティの再生

-3.11 から 962 日の記録-

災害とコミュニティラジオ研究会編／大隅書店／2,200円＋税

みるよむきく



本書は、困難の中震災後被災地各地に立ち上がった臨時災害放送局（以下、災害FM）をきめ細やかに取材した記録である。災害FM局は、大規模災害時に被害の規模を低減するため、情報共有を促進することを目的として臨時に開局できる放送局のことだ。阪神・淡路大震災の時に行なわれた「ゲリラ放送」が、被災した市民に取って欠かすことのできない情報源となり、後に法整備が行なわれ、現在の災害FMの制度が整備された。

大規模震災発生時、地域のラジオやテレビでは、カバーする情報が多いため住居に必要な情報が手に入らないことも多い。比べて、災害FMでは地元のスタッフや地元アクターと連携しニーズに合わせた情報発信が可能。そのため、きめ細やかな放送が可能だ。東日本大震災でも、岩手、宮城、福島そして茨城で開

局し、三十局にものぼる災害FM局が市民に寄り添った放送を続けた。本書でも紹介されている「南相馬災害FM（現・南相馬ひばりFM）」はJVCが支援を行なったFM局だ。開局から現在に至るまでの姿が、JVCの活動も含めて紹介されている。災害FMは通常二カ月程度で閉局する臨時の制度だが、東日本大震災に関しては被害が甚大だったこともあり、現在でも放送を続けている局が多数ある。放送の内容も緊急時の情報共有から、震災によりダメージを受けたコミュニティの再生のための意識共有に重点が置かれ、「復興FM」と自らを呼ぶ局もでき、市民に愛されている。

しかし、臨時で始まったこともあり、多くの災害FMの運営基盤は脆弱だ。資金面・人材面・体制面で多くの問題を抱えている。本書では、それらの問題も積極的に取り上げ、災害FMや復興に関わるアクターが忌憚なく意見を交わすシンポジウムの様子が事細かに収録されている。今後起こりうる災害に備える意味も含めて、貴重な体験談ばかりだ。復興に関わる者・メディアに関わる者必携の名著だ。

（震災支援担当 白川徹）

JVCは、現在9の国/地域と東日本大震災被災地で活動しています。

南アフリカ



■ HIV/エイズ(リンポボ州)

6月17～26日、01～08年に自然農法事業を実施していた東ケープ州カラ地域の農民3名と同事業の専門家が、経験交流の一環としてリンポボ州ベン

■「野菜を育てればお金はムダにならない」と熱弁。

ペ郡の事業地を訪問した。現事業地ではまだ基本的な有機農法が定着していないことに気付いたカラの農民たちは、大きな菜園を作らなくても、一つの畝(うね)から多様な作物を得られること、まずは家族が必要とする野菜を小さなスペースで育て、成功体験を積んでいくことが大切と、参加者に語りかけた。さまざまな課題を抱えるものの、一方で現事業地では若い人たちが多く菜園活動に参加していることがカラとは大きく違い、今後の活動に期待が持てると、参加者を勇気づける場面も見られた。

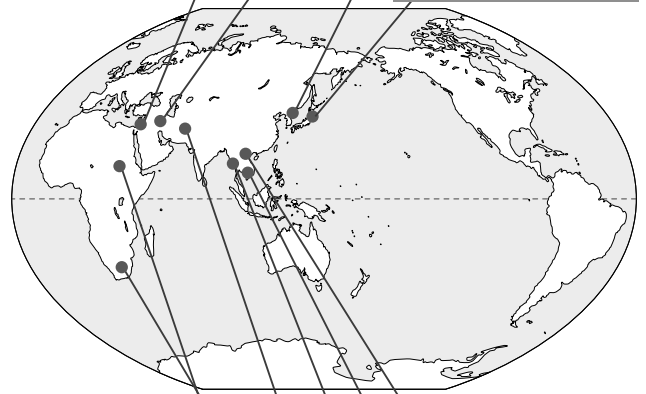
6月25日には、4月より新規に活動を開始したNGO・チルンザニ訪問介護で家庭菜園活動を紹介するワークショップを実施。5月中旬から開始する菜園研修の下準備を行なった。(富田)

イラク

パレスチナ

コリア

東日本大震災



スーダン

南アフリカ

アフガニスタン

ラオス

カンボジア

タイ

タイ



■ 農村派遣研修

タイの農村で学ぶインターンシッププログラムでは、14期生1名を採用した。9月にタイに派遣する。

■放射能汚染の状況を学ぶタイ人2名。

■ 日タイ若手農民交流

タイの原発建設候補地で暮らす住民などタイ人2名を招聘し、福島原発事故の影響を学ぶ交流プログラムを実施。原発反対運動の歴史や、県境を越えて影響を及ぼす放射能汚染の被害と補償の問題について住民の視点から学んだ。原発が単に発電技術の選択の問題ではなく、人々の生き方を問う問題であることに理解が深まった。(下田)

■ 南タイでの医療支援活動

タイ南部バンガー県でビルマ人労働者に対して、救急医療支援、健康教育、健康保険証発行等の医療支援を実施。マラリアが流行する雨季に入っていることもあり、JVCが支援する地域保健員が健康教育でマラリアの病状と予防方法の説明に力を入れている。また、敷島製パン労働組合のスタディーツアーを実施し、活動地を視察した。(樋口)

ラオス



■ 農業・生活改善/森林保全事業 (サワナケート県)

本格的な雨季に入るこの季節、村人は稲作に忙しい。稲作技術支援では、幼苗一本植え

■意識啓発ドラマを上演したブルー族の生徒たち。

(SRI)や、除草をしやすくする直線植えなどの技術を指導し、また有機肥料の作り方の研修も行なった。一方でこの時期は、昨年収穫した米がなくなる農家も出てくる時期でもある。そのため、米銀行を設置している村々では、米倉開きが行なわれ、村人への貸出しが始まった。その他、牛銀行活動では、牛を健康に育てるために必要となる牧草を導入し、牧草栽培エリアの囲いを設置、播種を行なった。

森林活動では、6月に演劇・人形劇を用いた土地問題や自然資源の大切さを教える意識啓発活動を行なった。ピン郡民族学校の生徒と協働して行なうこの活動は、生徒の夏期休暇に合わせ6月下旬から練習合宿をし、ピン郡5村で上映した。対象村に多いブルー族が話すブルー語を用いて上演したため、女性や子どもも参加でき、大勢の村人が集まった。村人たちは鑑賞を楽しみながら演劇内容にも関心を示し、大きな反響を得た。(林)

東日本大震災

■鹿折地区での復興支援 (宮城県気仙沼市)

5月18日、浦島地区復興会の総会に合わせて新潟県から講師を招き、中越地震発生以後の集落再生に関する取り組みを住民とともに

に学んだ。5月30日、旧浦島小学校にて「レクリエーションダンス」を催し、浦島地区の四集落の住民が親睦を深める機会を設けた。防災集団移転のアドバイザー派遣事業では、4月に開催した高台移転団地見学会の振り返りと「まちづくりルール」の再検討を行なった。6月26日、鹿折地区にある8カ所の仮設住宅入居者を対象とした交流イベント「あづまっぺ!『趣味のじかん』」を開催、当日は健康体操を実施し27名の参加を得た。(岩田)

■災害FMと仮設住宅サロンの運営支援 (福島県南相馬市)

仮設住宅4カ所における常設サロン活動支援を継続している。4カ所で月間約3,500人程度の利用があり、仮設住宅における憩いの場となっている。8月から小高区(旧警戒区域・居住不可地域)の長期特例宿泊が始まるため、仮設の住民の中には帰宅準備を進める人も増えている。7月6日にはピアニスト、ウォン・ウィンツァンさんをお招きし、南相馬支援コンサートを開催。サロン管理者の藤和子さんも南相馬から駆けつけ、活動の報告を行なった。コンサートには約80人が来場。癒しのしらべに耳を傾けた。(本誌14ページ参照)(白川)



■「あづまっぺ!『趣味のじかん』」の様子。

カンボジア

■生態系に配慮した農業による生計改善(CLEAN)

食品加工の品目を増やすため、グループメンバーを対象にしたバツタンバン県へのスタディーツアーを実施し、お米の加工品や小魚を利用した魚醬作りを学んだ。雨期に入り田植えの準備を始めている農家が増えてきているため、稲作改善の研修を実施している。

■環境教育(EE)

ゴミの削減に向けて、村の小学校、地域住民、地方行政職員とゴミ清掃イベントを行なった。共有林保護の活動では、樹木管理のためのボードを作ったり、共有林に植林するための苗木を育てたりしている。

■資料・情報センター(TRC)

プノンペンで農村開発や農学を学ぶ大学生を対象にしたフィールド実習を実施。JVCの連続講座を通じて学んだことを農業試験場や対象村で実践し、農家の生活をよくするためにどのような取り組みが必要かなど考えてもらう機会を作ることができた。

■技術学校

プノンペンにある職業訓練校と自動車整備工場の運営支援をしている(経営自体はすでに独立している)。コンピューター制御のシステムを学ぶべく、情報や人材を集めようと努力している。(坂本)



■スタディーツアーでお米の加工品を学ぶグループの農家。

コリア

■絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

◎平壤出張

今年度の交流行事に関する打合せおよび現地視察のため、6月上旬に平壤を訪問。平壤市内の小中学校での絵画展開催の可能性を含めて話し合いを行なった。展示会が実現すれば、平壤では8年ぶりとなる。

◎国内展

国内での貸出展示を継続。6月には水戸の県民文化センターにおいて茨城展が開催された。茨城展実行委員会の尽力で、地元からも50点ちかく集まった。7月初旬には、板橋区でも展示が行なわれた。

■内部勉強会

95年の自然災害への支援を契機に始まったコリア事業の振り返りを行なうため、人道支援や交流に携わってきた方々から経験を共有する内部勉強会を開始した。(寺西)



■初めて茨城県での展示が実現した。

スーダン

■紛争による避難民・難民への支援

紛争が続く南コルドファン州で、戦闘を逃れて流入した避難民と地元住民に対する支援を実施している。

4月までに菜園作りの活動はほぼ終了し、5月以降は給水支援に軸足を移した。カドグリ郡およびリフ・アシャギ郡の避難民居住区を中心に6本の井戸を掘削。住民が実施する既設井戸の補修に対しては交換部品を支援した。また、住民による井戸の維持管理を促進するため、手押しポンプの正しい使い方や定期点検の重要性を訴える啓発ドラマ(寸劇)を上演、集落あたり100~200人の住民が参加した。

6月、紛争が勃発して3年を迎えた。政府と反政府勢力との停戦交渉は4月末に中断したまま再開されず、5月から6月にかけて戦闘は再度激化している。(今井・佐伯)



■井戸の補修は住民の手によって行なわれた。

パレスチナ

■学校・地域保健事業 (東エルサレム)

6月前半から、西岸地区各地でイスラエル軍による大規模な軍事侵攻が行なわれ、パレスチナ人の死傷者が多数発生。JVCが訓練と救急物資の支援を行なってきた救急委員会の若者たちが、昼夜を問わず、分離壁の両側で負傷者の手当てに奔走した。また、学校が長期休暇に入ったため、現場医療チームは救急委員会をサポートしながら、子どもたちを対象にしたサマーキャンプでの保健教育、地域青年の救急法講習、女性の健康教育にも注力した。

■栄養失調予防事業(ガザ)

6月末までに、249人の子どもの栄養状態検査を行なった。また、79人の妊婦、55人の6ヵ月未満の子どもの母親、187人の5歳以下の子どもの母親にそれぞれ育児・栄養カウンセリングを行なった。幼稚園での衛生教育も継続している。ただし、7月初旬からの軍事侵攻を受け、7月8日から事業は停止し、再開のめどが立っていない。事業地の大きな被害が予想される。これに合わせて緊急支援を開始した。

■アドボカシー

6月から一時帰国中の金子が、東京・新潟でのトーク・イベントや講演などを計9回行ない、現地の状況やJVCの活動を報告。計380人が参加した。また、ガザへの攻撃停止を求める要請書を、7月11日付けで現地国際NGO34団体とともに国連及びEUに提出したほか、15日付で日本国内のNGO14団体とともに在日イスラエル大使館に提出した。(今野・金子)



■礼拝後の住民に応急措置する救急委員会の青年たち。

アフガニスタン

■地域保健医療事業

6月、現地から診療所医師と、薬剤などの物資調達を担当者が来日した。日本国内にある医療・福祉の現場を訪ね、国は違えども関連した保健医療の活動について、技術的な面よりも、地域に根付いた人びとに寄り添う姿勢や仕組みについて学ぶ機会となった。

活動地の村では、安全なお産や家庭でできる病気予防について女性たちがグループで学ぶ「母親教室」を修了した参加者の家を訪問し、学んだことが実践されているかの確認とアドバイスを行なった。村の指導者が主導して住民の健康向上のために取り組むための保健委員会の活動は、クズ・カシュコート村に続いて、ゴレーク村でも準備が進んでいる。

■教育支援活動

保健に関するテーマを生徒が作文し、学校の壁に貼り出すことで健康への意識を高める「健康壁新聞」の活動を実施している学校から、計123名の生徒が保健のテストを受けた。その後は学校が夏休みに入ったため、教育事業担当者は各学校から回収した健康壁新聞のレビューや、新学期からの活動準備を進めている。

■政策提言

現地スタッフの来日中に公開イベントを実施。二人の体験談とともに、今も続くアフガニスタンの厳しい治安情勢、医療事情について報告した。報告会后にテレビ取材も受けるなど、日本国内で積極的に現地の声を届けるための情報発信を行なった。(加藤)



■6月に来日し、東京事務所福祉の現場を訪ね、国は違えども関連した保健医療の活動について、技術的な面よりも、地域に根付いた人びとに寄り添う姿勢や仕組みについて学ぶ機会となった。

調査研究・政策提言

■NGO・外務省定期協議会「ODA大綱見直しに関するODA政策協議会臨時会合」(5月28日)

11年ぶりにODA大綱の見直しが行なわれることになった。見直しは、外務省が設置した「有識者懇談会」を中心に進められていたが、公開性の高い政策見直しや決定プロセスを求めていく本協議会の役割において、「ODA大綱」に特化した意見交換の場を臨時に設けた。既に数団体から出されていた提言書・意見書をNGO側が説明し、それに外務省側が考えを述べる形で協議した。この時の議事要旨は外務省HPに公開されている。

■NGO・外務省定期協議全体会(6月27日)

外務省会議室にて、2014年度NGO外務省定期協議全体会が開催された。例年通り、2013年度の二つの定期協議会の成果と課題を主要な協議事項として意見交換をする一方、今年度は特別に上記の「ODA大綱見直し」に関しても意見交換を行なった。(高橋)

イラク

■INSANの招聘を検討

6月のJVC総会後に開かれた「会員のつどい」に昨年イラク出張に同行された新潟国際情報大学の佐々木寛先生を講師として招き、代表理事との対談の後に非暴力トレーニングのデモンストレーションを行なった(本誌特集も参照)。また、6月に入りイラクの現地情勢が悪化したことを受け、これまでイラク北東部のキルクーク県で行なってきた複数の民族や宗教の子どもたちを集めるワークショップを今年度も継続するために準備をしてきたが、戦闘地域からキルクークにも国内避難民が流入しており、国内避難民への支援について検討した。今後、現地パートナー団体のINSANの代表を日本に招聘し、JVCとして何ができるか協議する予定。(谷山由・池田)



■谷山と対談する佐々木先生(写真中央)。

国境無きソラと

地球と私

〈滋賀県 奥村 敏章

私がJVCの会員になったのは今年の二月とまだ日は浅く、「今の自分に出来る事は何か?」と模索する日々を過ごしています。

会員になるきっかけは、二月三日。猛獣が闊歩するサヴァンナを数時間かけて登校するマサイの子どもたちが、給食で出される煮豆を何よりも楽しみにしているというテレビ番組を見たあとで、日本の節分の「豆まき」を目にし、「この差は一体何だろう?」と疑問に思ったことです。

「豆まき」に使える余剰な豆が有るなら、そう言った



国内ひろば

JVC network

地域の子どもたちにわからないのか? そんな思いで検索してJVCに辿り着き、迷わず入会しました。

しかしながら、今の自分出来る事は少なく、日々の生活で精一杯だったりします。ですが、JVCの活動をもっと多くの人に知ってもらおう事なら出来る。そこで、地元の病院にパンフレットを置いてもらえる様、交渉しました。

また、少しでも多く寄付ができる様に、休みの日を活用してある事業を年内中に立ち上げるプランもたてています。

最後に憲法九条に対する思いを述べます。私は幼い頃より「武道」の技術を修練してきました。小学生の頃から高校までの十年間は「柔道」、その次の一年は「戸隠流忍法体術」、さらに「空手道」を九年、今は「居合道」三年目です。そこから得た答えは「力を捨て去る事こそが本当の強さ」だと云う確信です。「力」を持つものが、その「力」を頼ると同じ様に、「武力を持つとその武力に頼ってしまう」のです。でも、力を持たないものは違います。力を持たないが故に知恵が生まれ、知識につながります。知恵を活用することで「力」を使わずに理解を深めて、解決できる方法」を紡ぎ出して行くのです。この差は歴然で、「武力に頼らず発展してきた今までの日本」を見れば、納得できると思います。

六月の総会で出会ったスタッフの方々は、現地での支援を続ける中で、「心の種」を蒔いておられると感じました。この場をかりて、スタッフと、会員の皆様、惜しみない協力支援をされている方々に、感謝の意を表したいです。

イベント報告

「瞑想のピアノリスト

ウォン・ウインツァンコンサート

〜福島を想う七夕の旋律〜

七月六日、新宿御苑にあるマエストロ音楽院で南相馬事業支援コンサートが開かれました。出演したのはNHKの番組(「にっぽん紀行」「家族の肖像」など)のテーマソングで知られるウォン・ウインツァンさん。二回の公演を通して約八十名の方が来場。ウォンさんは童謡の「ふるさと」や「たびのはじめ(NHK「にっぽん紀行」テーマ曲)」、「運命と絆(NHK「家族の肖像」テーマ曲)などを演奏されました。このコンサートにあわせて、南相馬における仮設住宅でのサロン活動の協力団体「NPO法人つながっぺ南相馬」の事務局長兼副理事長の藤和子さんも駆けつけてくださいました。ご自身も原発に近い南相馬市内小高区から避難されている藤さんは、仮設住宅でのサロン活動の様子や自身の故郷の様子について報告。集まった方々も熱心に耳を傾けていました。

ウォンさん自身も、震災以降に二度南相馬を訪れています。藤さんの報告を受け、「南相馬市では昨年度十四名の方が仮設住宅などで孤独死されました。そういう地域で頑張っているつながっぺ南相馬やJVCの支援をお願いします」と話されました。(震災支援担当 白川徹)



ウォンさんのご好意で、会場で販売したウォンさんのCDの売上をJVC南相馬の活動に寄付していただきました。

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税制優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金 (郵便振替)

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495
加入者名：JVC 東京事務所

5月計 6,212,096 円
6月計 1,159,800 円

	5月	6月
無指定	5,116,096 円	40,000 円
タイ	5,000 円	0 円
カンボジア	50,000 円	13,000 円
ラオス	1,023,000 円	17,000 円
南アフリカ	3,000 円	0 円
パレスチナ	8,000 円	61,800 円
アフガニスタン	2,000 円	17,000 円
コリア	0 円	0 円
イラク	0 円	0 円
スーダン	0 円	500,000 円
東日本大震災	5,000 円	421,500 円
調査研究	0 円	89,500 円

※上表には「夏/冬の募金」は算入していません。

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497
加入者名：犬養道子「みどり一本」

5月計 33,000 円 / 9 件
6月計 122,000 円 / 9 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としができる手軽な募金方法です。

5月計 2,239,200 円 / 1,924 件
6月計 2,239,700 円 / 1,919 件

編集後記

優勝国以外負けて終わる大会、「どうやって敗退するか」がワールドカップ。その意味で、これまでの積み上げをあまり出せなかった（出させてもらえなかった）のは単純に残念だが、「自分たちのサッカー」を選手自らが求めてきた経緯を知るにつけ、今回の彼らのチャレンジの失敗を笑えるほどには軽薄にはなれない。サツケローニありがとう、そしてドイツ優勝おめでとう。(H)

東京事務所 イベント一覧

この夏、JVC は多くのイベントを開催しました。
また、他団体主催のイベントにも登壇させていただきました。

7月6日	シンポジウム「イラク戦争とわたしたち」 (他団体主催、谷山登壇)
7月6日	瞑想のピアニスト ウォン・ウィンツァンコンサート (本誌 14 ページ参照)
7月12日	JVC アフガニスタンの母子保健活動に関わって (九州、他団体主催、西登壇)
7月12日	まなびカフェ「どうして反対するの? 集団的自衛権」
7月18日	紛争地から考える集団的自衛権 (他団体主催、谷山登壇)
7月21日	STOP! 空爆 ~ガザの命を守りたい~ (他団体と共催)
7月24日	被占領パレスチナの人権状況と国連と NGO の役割 (他団体と共催)
7月29日	日本の食卓とつながるプロサバナ事業 (他団体主催、渡辺登壇)
7月30日	パレスチナ・ガザ地区における人道の危機と援助の現場 (大阪、他団体主催、今野登壇)
8月1日	JVC 居酒屋：元自衛官と語る集団的自衛権
8月7日	人道支援団体スタッフが聞いたガザの叫び
8月9日	映画『自由と壁とヒップホップ』緊急上映会 (他団体主催、今野登壇)
8月19日	パレスチナ人女性が話す、パレスチナ問題と JVC の 学校保健事業

総務の細野が事務局次長になりました



ほその じゅんや
細野 純也

今年6月に、これまで本誌のレイアウトや総務を担っていた細野が事務局次長に就任しました。

数年前までにも、主に地域開発活動の事業運営を厚くみるために同じく次長職が置かれていたことがありましたが、今回は団体内の労務面を見ていくことが主な業務になります。2011年度の外部監査の実施、昨年度の認定 NPO 法人格の継続取得やそれに伴う定款変更など、ここ数年は JVC の組織内部を整えていく業務が増えてきており、その一環として職員の労務面での整備を実施していくこととなります。

「組織ばかり大きくしてどうするんだ」という声も聞こえてきそうですが、活動地での活動(外)を支えるために組織(内)を固める、とご理解していただけると助かります。引き続きのご協力をお願いいたします。

JVC ウェブサイト 会員専用パスワード (2014年9月~10月):

HyC4dPrFKn

JVC ウェブサイトから T&E のバックナンバーをダウンロードするときに必要です。

暮らしを彩る道具

LIFEWORk ITEMS

96

Minami-Soma



苗を植え替えるための機具 (定植機)

福島県南相馬市で昔から有機農業をされているSさんの農場を訪れた際に見せてもらったもの。農業が機械化される前に、すこしでも効率よくトマトの苗を植え替えるために先々が作られたもののだそうだ。来日していきいしょに訪問したカンボジア人スタッフも、実際に試してみて、持って帰りたいそうだった。

(福島県南相馬市にて撮影)



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回この会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
- ◎学生会員 5,000円
- ◎団体会員 30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。入会のお申し込み、会員の方の住所変更などは会員担当の宮西へ。 → miyanishi@ngo-jvc.net

会員数 (8月5日現在) 合計 1,098名
 (正会員 552名、賛助会員 546名)

■オリエンテーション (説明会) にお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。会場はJVC東京事務所、参加費は無料、予約不要です。

- ◎第1月曜日午後7:00 - 8:30
- ◎第2・第4土曜日午後2:00 - 3:30

■ E-mail

info@ngo-jvc.net

■ ウェブサイト

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」(古紙90%、間伐材パルプ10%)で作成しました。

